

りの地域からの汚染風の流入→健康障害→郊外に移転→都市開発、といふ悪循環を汚染の抑止の面から早期に断ち切らないと将来に大きな悔いを残すことになるのではないか。どうか。

今私たちは、おだやかな日に吹くそよ風の「にお

季節の風

柴田文子

と、妙に気になつてきました。大字典を引いてみると、こんなことがわかりました。気候の異なるのに従つて風が異なる。そして風の異なるのに従つて、その折々に虫類が孵化する。だから虫という字

い」や風に含まれる「物質」に強い関心を持たなければならぬと思います。環境とくに敏感で被害を受けやすいのは幼児たちの体なのですから。

* 日本音楽著作権協会(出) 許諾第九〇一四五四七一〇〇一号

を書いて、その意味を示しているのだということですね。なる程面白いですね。

そして気候の変化に富んだ日本では、その季節季

「黒南風」とい、梅雨明けの頃に吹く風を「白南風」といいます。日本人が、昔からどんなに深く風と関わって暮らしてきたかが、よくわかりますね。

節に吹く風を、いろいろな言葉で呼びならわしてきました。歳時記をちょっと開いてみても、「東風」、「春風」、「風光る」、「風薰る」、「黒南風」、「白南風」、「颶風」、「野分」、「秋風」、「木枯し」、「空風」、「等々」、風に関する言葉がたくさんみつかります。例えば、「東風」といえば、「東風吹かばにはひおこせよ梅の花……」と、あたりにも有名な菅原道真の歌がありますが、早春の風をいいます。春というにはまだやや寒い季節の風で、「春風」とは微妙に違っています。「風光る」は春の季語ですが、「風薰る」は夏の季語となっています。また同じ夏の風でも緑の林や草原を吹きわたる風は、「青嵐」と特別な呼び方をすることもあります。「黒南風」はふだんあまりお目にかかるない言葉ですが、梅雨どきに吹く南風のことです。梅雨にはいる頃、この風が吹いてきて空が暗くなるので

外国にも風を表す言葉はいろいろあるのでしょうか。私の乏しい経験から、ちょっと考えてみました。数年前、夫の仕事の都合でアルジェリアの首都アルジェにおりました。北アフリカに位置し、地中海に面しているのですが、国土の十分の九は砂漠という国です。夏は摂氏四十度前後になることもしばしばでしたが、割合乾燥しているためか、それ程つらくなはありませんでした。冬場も子ども達は夏のTシャツの上にセーターを着るくらいで遊びまわっておりましたから、気候的にはずい分住みやすいところだったと思います。ただ夏場に「シロッコ」というのが吹いてきます。これには参りました。サハラから砂漠の砂を巻きあげて吹いてくる熱風なのです。これがやつてくると空は砂色になり、太陽も光

を失い、ただかすかに赤く空にかかるつているだけになってしまいます。人間たちはただ窓という窓、扉

す。サウナ風呂の中で我慢くらべをしているような感じでした。四年近くおりましたが、アルジェでは、風といえどシロッコ、それ以外の思い出がありません。気候の変化が比較的大まかな風土では、季節の風に微妙な変化をよみとる必要性もなく、従つて風にいろいろな呼び名をつけるようなこともなかつたようでした。滞在中、一般的にいう「風」と「シ

風は人の心に様々な思いをひきおこします。さわやかな風に口笛でも吹きたくなるような楽しさを感じたり、秋の風にふともの寂しさを覚えたり……。昔から詩人たちは風に魂を揺り動かされ、たくさん美しい歌を生んできました。現代短歌から、私の好きでたまらない歌を二首、紹介したいと思います。

子を産みて瘦せし野良猫白南風の
くさむらに来てしづかにすわる

「ローラン」という言葉以外に、風を表す言葉を聞きませんでした。もつともあまり上手でないフランス語と、挨拶程度のアラビア語しか通信手段をもつていて、ない私でしたから、確かなことは申せないのであります。

パリや地上最後の樂園などとよばれるマダガスカル島にも、しばらく暮らしておりましたが、ともかく「更衣」などという行事が今でもしつかり日

梅雨明けの明るい日、温かな南風が吹いています。子を産んだ母猫がやってきて、静かに草むらに座りました。やせて産後のやつれはみられるものの、その様子には、なんとなく満ちたりたものが感

じられます。人間と猫という違いはあっても、同じ
産む性への共感というのか、やはり幾人かの子ども
の母親である作者の、あたたかな目が感じられると
思います。もう一首

気候の変化に富む日本の風土、そこにはぐくまれてきた細やかな言葉の数々、そして歌に記された人間の心の世界、そんなあれこれを思うとき、私には日本人であることが、なにかとても嬉しいことに思われるのです。

秋草に埋もれ転がるあそびして果てに

聞きしか野をゆく風を
武川忠三

（我孫子市せせらぎ短歌会

作者の少年期の回想の歌です。野原で転げまわつて遊んでいるうち、ふと気がつくともう日も暮れかけている。そして草原をわたる寂しい風の音を聞いたというのです。美しい歌ですね。ファミコンなど室内での遊びが多くなったこの頃の子ども達は、大人になつたとき、自分たちの子ども時代をどんなふ

うに思いおこすのでしょうか。この歌のような世界に、全く共感を持ちえない世代が育っているのではないかと、とても寂しい思いがします。

